頚部椎間板逸脱症の 112 例

2007．12　　名古屋臨床集談会
なかはら動物病院　　中原公彦

はじめに：頚部椎間板逸脱症の場合、その椎間板物質の逸脱方向によって、手術方法を選択することが重要であると言われている。すなわち、逸脱方向が背側正中方向や傍正中方向の症例では、腹側減圧術が有効であり、背外側逸脱型では、片側椎弓切除術か背側椎弓切除術が適応とされている。

今回、2000 年２月から 2007 年 5 月までの間に、当院に来院した頚部椎間板逸脱症の 112 症例に対し、若干の知見を得たので報告する。

症例：症例は 2000 年 2 月から 2007 年 5 月までに来院し、頚部椎間板疾患として減圧手術を実施した 112 症例である。また 2004．6～2007．5 までの 62 例について逸脱部位と重症度の関係も調べてみた。
重症度は頚部痛のみの軽度のものから、起立歩行が不可能（横臥状態）であるものまで様々であった。

結果：１．犬種は、112 例中、ビーグル（25 例）とダックスフント（22 例）が圧倒的に多かった。（２種で 42%）
２．重症度は疼痛のみのＧ：１が 40 例、神経学的検査で異常が認められるが起立歩行可能なＧ：２が 30 例、起立歩行不可能ではあるが四肢の随意運動は存在しているＧ：３が 25 例、随意運動も不可能なＧ：４は 13 例であった。深部痛覚が消失している症例はなかった。**（表１）**
３.椎間板逸脱方向が背側正中逸脱タイプは48/62例､傍正中逸脱タイプは14/62例あった。背外側方向の逸脱症例はなかった。
４．逸脱部位は責任病巣 119 椎間中、C2-3 が 29 症例、C3-4 が 28 症例、Ｃ4-5 が 22 症例、C5-6 が 24 症例、C6-7 が 13 症例で、C7-T1 は 3 症例であった。（2 箇所逸脱症例が 7 例あった。）**（表２）**
５．手術方法は腹側減圧術（ベントラルスロット）が 61/62 例、背側減圧術（ラミネクトミー）が 1/62 例であった。

考察：椎間板物質が傍正中方向に逸脱した症例において、ベントラルスロット法では静脈叢が邪魔をして逸脱物質を十分除去できないと言われている。また頚部椎間板逸脱症では、その逸脱方向は傍正中方向が多いとも言われている。

今回当院では、62 症例中 14 例（22.5%）が傍正中方向に逸脱しており、48 例(77.5%)は背側正中方向であった。またそのどちらもベントラルスロット法で十分逸脱した椎間板物質を摘出除去でき、満足できる結果が得られた。

また逸脱部位と重症度との関係では、頭側頚椎では軽微な症例が多く、尾側頚椎は重症な症例が多かった**（表３）**。しかし発症からの時間を考慮していないので、必ずしも尾側に行くほど重症であるとは言い切れない。

表１：重症度（108 例）

重症度	症　　状	例　数（頭）
1	疼痛のみ	４０
2	起立歩行可能。神経学的検査に異常。	３０
3	起立歩行不可能。随意運動あり。	２５
4	起立歩行不可能。深部痛覚あり。	１３
5	起立歩行不可能。深部痛覚消失。	０

表２：逸脱部位（112 例―119 椎間板）

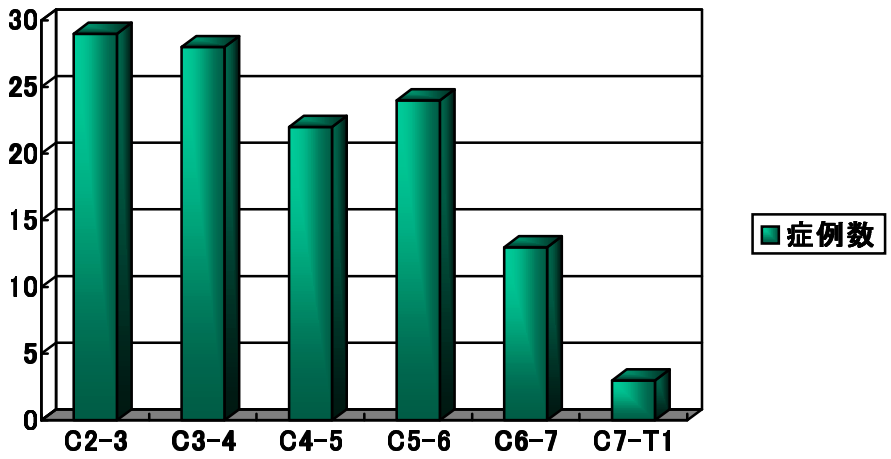
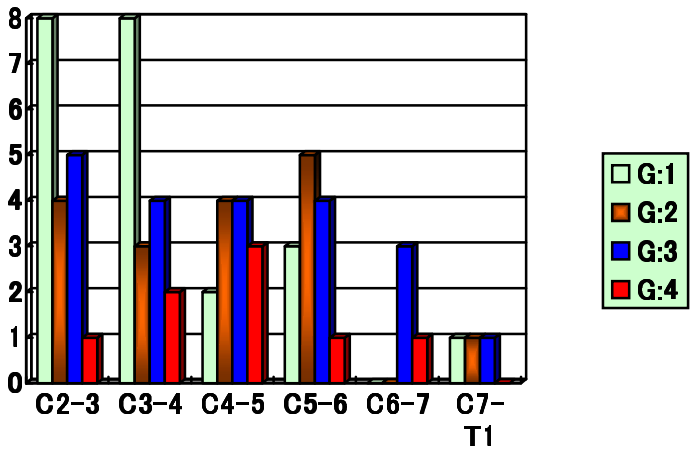
表３：逸脱部位と重症度の関係（62 例―68 椎間板）